

ポジティブサポートの世界(1)

ポジティブサポートに出会う

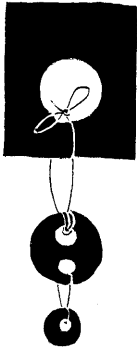
村田 愛

私は、八歳の時にある養護学校に出会い、数人の子ども達とお友達になりました。今思うと、私達は言葉でコミュニケーションをとっていた訳ではありません。しかし、それは、『人と太くつながる』今の私の原点となる体験でした。現在は、知的障害のある人を対象にポジティブサポートというセッションを行っています。この連載では、ポジティブサ

ポートとは何か、その中心となる考え方を紹介していきます。今回はその導入として、私が特殊教育の実習で疑問を感じ、生きる道について考え直し、そして、ポジティブサポートに衝撃的に出会った話をします。その中で、ポジティブサポートの根幹であるへその人中心の考え方の一端を感じていただければと思います。

大学一年生の現場体験

ニューヨーク大学に入って、特殊教育を勉強しはじめた私は、一年生ではいろいろな養護学校や特殊訓練校や施設にほぼ毎週、見学につれていかれました。それは、特殊教育専攻の必須科目の一環で、いろいろな種類の場の体験を基にディスカッションをして、その後レポートを書くことがその科目の主な内容でした。客観的にその場を見学し、私達学生がその場について問題提起をどれくらいできるか、私達の将来のビジョンの柱（こんな風にはなりたくない／こんな風にしたい）を作り上げる最初のステップです。さらに、それぞれの場の改善策のようなも



のが明確に提示できたら、まずは言うこと無し！
日常の体験を振り返り、次につなげるということ
が、将来の“教育”に携わるであろう人たちには欠
かせないことです。それを習慣付けることも兼ねて
いたと思います。

何が問題？

一年生では、特殊教育という科目もあり、様々な
障碍の種類や特徴を本で学びレクチャーされる科目
もとりました。ところが、私は当時、「特殊教育を
専攻したのは、障碍の多様な種類や特徴、学校／施
設で用いられるアプローチを情報として知りたいと
思っただけではない」と思い、苦しかったのを覚えてい
ます。本や講義で伝達される“ドライな”情報が多
く、頭がいっぱいになってしまい、最初はただ「私
に向いていないのかも」と考えました。でも、十歳
くらいの時からの私の夢が、こんなにあっさりとお

手上げという形で完結してしまうのもスッキリしない悔しさが残る。もう一度、自分がなぜ特殊教育を勉強したいと思ったのかを考える必要があります。た。

私は、なぜ苦しいのかを考えているうちに、漠然と『人が見えない』というのが私にとって問題なのだと思付きました。大学生として、本や情報を通して「人が見えない」教育を受け、「人が見えない」教育をする為の勉強をしているかのように感じていました。けれど、私達は、関係の中に生きています。本や情報だけで、そこにいる「人」を理解することはできません。多様なアプローチを知らされても、問題解決と処理ができないものもたくさんあるでしょう。それが、その頃には具体化できなかった私の苦しみだったように思います。

実際に見学に行くと、学校の先生や施設の職員

が、「そのポリシーが何か」を話してくれてから、その現場を見に行きます。見学中、「なぜ手の届かないようなところに実用的であるはずの棚があるのか」、「なぜそんなにもカギが多いのか」、そして、「なぜ外からカギを閉めるような部屋があるのか」

など学生の私達が質問します。そうすると、積極的に見せてくれ、あたかも正当な理由があるようにお話ししてくれる人もいました。例えば、「刺激が強すぎて落ち着かなくなつた時には、自主的にその部屋に行きたいと申請するように教えている」、または「落ち着かなくなつたら、『イエローカードだね』と忠告して、それからその状態の強弱と継続する時間を計測し、それによつては、『レッドカード』で自分を傷つけられないように壁も床もマットのようなものでカバーされた部屋につれていく」という話でした。そういう話をしてくれる人は、へその人の為〜と信じていたと思います。

ところが、どのような意向で独房のような部屋を

使うか、という話を聞いても、私には「ざわざわするものが残るだけでした。なぜその様な部屋が学校に存在するのだろうか、理由を話されても、へ自主的に」という言葉を使われても、寒気がするのです。自主的という言葉がふさわしくないのです。セルフコントロールができるようにという目的だといわれても、わたしには罰としか見えませんでした。その独房に入れたとしても、何の「解決」にもならないし、何も始まらないのではないか、と思えました。ただ、そこで手にとるようになるのは、その連れていかれる生徒の行為が教師によってどうとらえられたかということだけです。つまり、そこでは、その生徒本人にとって何なのかということは問題にされていないのです。「独房」につれていかれる人の姿や表情を見ると、私は何かしたい衝動にかけられました。「それは、そこに人がいるから」とこ

れもまた漠然と思っていました。

混乱している私、レポートを書く？

入学から解放された後、そんな支えきれないような気持ちを持ち帰りながらも、レポートを書かなくてはなりません。そんな時は、混沌とした状態で、感情的で抽象的な、誰に投げかけるでもない疑問・質問ばかりを提示していたと思います。でも、そこで言いたかったことは、「私だったら、ある行為のとらえられ方で独房に入れられるなんて悲しすぎる。そして、ある行為に対して決まった行為で応答するような立場にもなることはできない」ということでした。

ディスカッションで話していても、楽にはならないし、整理もできない。その方法論が間違っていると考える人も、そこではそれが必要と考える人もいて、ディスカッションがヒートアップすることもあ

りました。でも、私は、そこで外部から短時間客観的に見て何かを攻めることが、建設的に何かに反映されるのか？ などと考えていました。そのディスカッションでも「人」が思い浮かばないのです。

そのへ間違った方法論を訂正し改善でき、そこで生活している人達や子ども達が過しやすいようにすることは重要だと確信しているけれど、どうすればいいか。なにが表現したいか。まずは私の中を整理しなくてはと思えば思うほど途方に暮れました。

私の最も関心のあることは、人との関わりの中で生まれたり変化することです。ところが、その頃要求されていた行為は、組織的な考え方、規律、問題に対するアプローチに基づいてどう考えるかを話し、まとめてレポートとして書き出すということでした。私にとっては、それらは人が見えてはじめて大事になることだと感じていました。しかし、私には、「人が見えない」のです。「人が見えない」ま

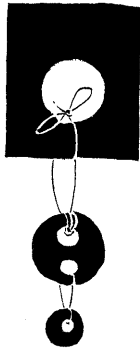
ま、すでにできあがっている何か（組織）に直面しているようで、私には大きすぎ、混乱していたのでしよう。

順番が逆

大学二年目には、養護学校での集中的な実習が始まりました。実践を重要視するアメリカの大学では、一つの学校で週に二十時間の実習を一学期間継続的に行います。卒業するまでには、少なくとも四学期間、すなわち四校へ実習に行くことになりました。それは、私にしてみると、やっと物理的に人に接し「人が見える」という救われる体験のはじまりとなりました。どこに行っても、「私だったら……」ということを考え、その生活空間・環境をとらえてみることを始めたのもその頃です。『人がいて集団があり、組織がある』という明解なことが実感できると、以前感じた苦しみ、混沌としたものが自分の

中で形になって整理され、エネルギーがわいてくるようになりました。私にとって重要だったのは、
「その行為に何が表現されているのか」ということ
でした。「問題行動」をせざるを得ない状況は、その人にとってかなりの葛藤でしょう。その行為を
「問題行動」として処理される人の気持ち、が私には
気になって仕方がなかったのです。

後にポジティブサポートを紹介してくれた教授
キャロル (Dr. Carol Gotthelf) のクラスをとったの
も同時期でした。キャロルは、『カギ反対』、『自己
決定促進』などを徹底的に具体的に推し進めるとい
う姿勢で授業を展開していました。私達が使う言葉



にも注意をはらうべきである、と口癖のように言
いました。学生が「問題行動」という言葉を使えば、
それは、誰にとって問題なのか？ と問いました。
キャロルは、「問題行動」は、その環境に問題が
ある時に起こる」と言うのです。ほぼ毎回の授業で
キャロルは、具体的に考えるべきことを羅列したも
のを私達に配ります。例えば、問題行動として、その
「行動」問題、もしくは「問題」その人」という
見方は間違いである。そして、「問題行動」は必要
だから起きていると考えるべきだと言いました。
なぜそのようなことになったかを考え、どうして
いくかを考えるには、私達が振り返り反省します。
具体的には、1. その人に選択肢は存在したか、
2. その人に伝わりやすい方法で状況を伝えられたか、
3. その人が表現しやすい方法を熟慮し提案して
あったか、4. 難しいこと／苦手なことを一度に長
時間要求しなかったかなどを考え直します。

それは、その人の立場に立つて考えてみることに、その状況を客観的に見てみることを要します。その頃に、〈問題行動―対策〉というアプローチの仕方に対する私の中で消化できなかった何かが、少しずつ明確になってきたのです。問題だけに焦点を当て、解決しようとするのではなく、より望ましいアプローチとは、その場・状況、そして〈その人〉を最初に考えることが、必要なのです。いろいろ〈対策〉を試してみてぶつかるといふことは、もしかしたら、まだ〈必要なこと〉が充分にできていないからではないかと考えるようになりました。常にそうして〈必要なこと〉を考えていけば、〈問題行動〉が起こる必要のない環境が整うのではないかと信じられるようになってきた時期かもしれません。

そして、ポジティブサポーター！

学期も後半に入ったキャロルのクラスでは、ポジ

ティブサポーターを紹介されました。それは、衝撃的でした。まずは、ポジティブサポーターの思想的な部分を紹介され、「人」のとらえ方は多面的であるべきだと言われました。つまり、学校で見えている子ども達の姿はほんの一面でありそれ以外の生活空間（家庭内）や人間関係などもふまえる努力が不可欠であるということでした。それがその子ども達の多面性を明らかにして、生活の中に連携と協力をつくり出し、できるだけ建設的な学校生活を創るカギを握るのではないかということを実感しました。

ポジティブサポーターの実際は、一人の人の将来を、本人とまわりの人と共に、建設的に、その人の多面性、可能性、個性を生かし作っていく作業です。その中心となるのが、セッション（実践）で、その子どもに関わる人々が集まり、そこで掲げられる課題について好意的・肯定的に順番に発言していきます。課題はそこでファシリテーターによって掲

げられたもので、それは、例えば『くちゃんの好きなこと』などから始まります。

私達は、実習先でポジティブサポートのセッションを実際に行って、自分なりにそこからその子どもの近い将来を考え、クラスで発表することという宿題を出されていました。それは、驚くほどに気付いていなかったその子の多面性が見えてくる体験でした。そして、そこで想像力を使ってその子の将来を考えるということ、そしてそれが楽しいものであるということも新鮮な体験でした。しかし、その頃にもまだ、ポジティブサポートの偉大さは知らなかったと言えるでしょう。セッションを一度行ってみただけでは、ポジティブサポートの偉大さは分からないものです。

その後、私達のクラスに、ゲストスピーカーとして、色々な協力者と共にポジティブサポートを完成させたベス・マウンツ博士 (Dr. Beth Mount) が来

たのです。

ポジティブサポートと出会って

ポジティブサポートとの出会いは、私の人生に大きく影響を及ぼしています。私がポジティブサポートに魅かれたところは、可能性に基づいて作っていく作業であることです。「人が生きる」ということを考える時、変わることを強いられたり、枠におさまることを要求されることに抵抗感を持つのは、自然なことだと思います。私は、『その人らしく生きる』が大切だと考えます。ポジティブサポートは、その人らしく、納得し、協調性を持った、輝いた生き方ができるということを示してくれているように思いました。何かを壊して、変えるのではなく、そこにある現実から始めて、築き上げていくという発想のポジティブサポートには、その人にとってより望ましい環境や将来を考えていく力を促す原動力があ

ると思います。

人が見えない「組織」に向き合うという課題は、私には大きすぎて負担にしか感じられませんでした。「順番が逆」に感じていたのです。『そこに人がいるから』そこから考え、展望を持ち、将来像を協力的に作り出していくという発想のポジティブサポートに安心感を覚えました。

混乱していた時を振り返ると、その時の私は、行き詰まり、視野が狭くなって、「今が将来につながるっている」ようになど感じられませんでした。私に「問題」だと感じていることに耳を傾け、私なりに解決することをサポートしてくれる人を必要としていたことに、キャロルとの出会いが気付かせてくれたのです。私を感じる問題がある時、それを解決するのも結局は私です。そして、そのような時に必要としているのは、〈問題解決対策〉ではなく、私自身が、解決することをサポートしてくれることだった

のです。それをポジティブサポートで参加者は感じるのでないでしょうか。

対策にとらわれるのではなく、その人やその人が置かれている環境を協力してとらえ直すことの大切さに気付きました。そうしてはじめて、それぞれの人が社会の中で生きる上で、その人が必要としていること^①を考えることができるのだと思います。その人の現在をまわりの人と共にとらえ直し、その人の多面性を大切にすることが、「その人の生き方」を考えることを可能にするのではないのでしょうか。この様なポジティブサポートの視点をもつことで、〈今〉から〈将来〉に向けて立体的に展開し、人や現実、そして将来が、膨らみを持って見えてくることを実感させてもらったのです。

(ポジティブサポート研究室主宰)